

出張報告書

会議名: 欧州研究公正会議 (European Conference on Research Integrity: Why Research Integrity Matters to You)

開催地: ボン大学、ドイツ

開催日: 2018年2月5日～6日

【会議の概要】

欧州研究公正会議(European Conference on Research Integrity)は PRINTEGER(Promoting Integrity as an Integral Dimension of Excellence in Research)^{*1}という研究グループが主催していた。出席者は約150名で、主に欧州の国々の大学や研究機関の教員や研究者が参加していた。また参加者の専門領域は、研究倫理や研究公正、あるいは利益相反やデータマネジメントからなり、この研究公正にかかる幅広い領域をカバーするものであった。今回は参加した研究者の国ごとに、研究倫理にかかるルールの有無、所掌機関などそれぞれ制度があり、そして言葉・解釈・考え方も少しずつ異なっている。国際共同研究も今後益々増加していく中で、研究不正を予防し研究公正をどのように促進していくのかの観点で、最新の研究成果や興味深い発表・議論があった。その中からいくつかのキーとなる発表内容についてまとめた。

^{*1} PRINTEGERとは Horizon 2020[#]の枠組みで出資された研究事業で、期間は2015年9月～2018年9月までの3年間である。欧州の複数の Research Integrity(以下、RI)を研究する7か国(8大学)のグループから構成されている。参加大学は、Radboud University Nijmegen(オランダ)がハブとなり、University of Tartu(エストニア)、Vrije Universiteit Brussel(ベルギー)、Oslo Research Group on Responsible Innovation(ノルウェー)、University of Bonn(ドイツ)、University of Trento(イタリア)、Leiden University(オランダ)、University of Bristol(英国)からなる。PRINTEGERは、研究は誠実に行うという research culture を促進することで RI を広げていくことを目的として、各国の取り組みなど調査研究を通じて、RI のあり方を啓発していく研究プログラムである。

詳細は URL: <https://printeger.eu/>

[#]Horizon2020とは、最長で2014年～2020年の7年間、総額約800億ユーロの欧州で最大の研究開発のファンドである。欧州の研究機関や企業が応募可能である。このプログラムは新しいアイデアやコンセプトからなる研究成果に集中的に投下し、開発にかかるハードルを容易に突破させ市場へ早期導出し、新しい時代のブレイクスルーをより多く生み出すことを目的としている。

【RIに対する全体的な定義や考え方】

1. Opening Session: 「Research Integrity as a new Battlefield for Concepts of good Science」

Dr Willem Halffman (Radboud University)

最初に、演者は Sport にかかる倫理観から始めた。Sport は、ルールを守って、お互いを尊重し、ドーピングをつかわない、競争である。Research は Sport とほぼ同じであり、競争ではあるが、ドーピングは使用してはいけないことを強調していた。また、RI を促進するため Professional rules の形成ロジックとして、manageable, translation, outside world, emphasis などが重要であることも話した。更に、演者は Research integrity の最近のトピックの一つとして、H-index を挙げていた。H-index とは発表論文数(量)と被引用論文数(質)を表す科学者の研究に対する相対的な貢献度を示すものであるが、研究分野によってもこの係数は異なっていて一概に研究活動の指標にはならないことに注意が必要である。この H-index は引用をしてほしいと同僚などに頼むことで H-index を高くすることが可能なため、不正に数値を上げることができるといった問題提起をしていた。最後に、研究不正は身近なところで起こっているため、誰にも相談できないことも多いため、健全な RI のためには研究機関内にオフィスとカウンセラーを設置することも重要であると唱えていた。

2. Keynote: 「Research integrity and Self-regulation」

Dr Maura Hiney (Royal Irish Academy)

演者からは、RI の考え方としてこれまでの大きな研究不正の事件を考えると、Self-regulation の範囲を超えて、RI を組織の課題と捉え研究機関全体で考えていく必要があるという話があった。Research integrity を進めるには、5つのことが重要である。1つは「Governance」、Code of Conduct などまずルールを作り環境を整備すること、そして2つは「Promotion」、作成したルールを広め、研究不正の予防を行うこと、3つは「Dissemination」、研究機関内外に RI の活動をオープンにしていくこと、4つは「Finding」、研究者の成果を評価してキャリアパスを作っていくこと、最後に5つは「Environment」、RI の文化を構築し、そして継続していくことである。また、演者は RI の教育についても触れ、講習会などのトレーニングよりも、メンタリングの方が効果的であるため、若い研究者からのメンタリングを充実していくことの重要性を強調していた。

【各国からの調査研究の発表】

1. 4 か国 (UK, Italy, Estonia, Norway)

Dr Mari-Rose Kennedy (University of Bristol)

演者は共同研究者とともに4か国での Good methodology に関する調査研究の結果発表を行った。研究者や事務担当者を対象にインタビューによる調査をまとめたものを発表した。そして実際には、4か国にわたっての国際的な調査は言葉や解釈の問題もあり、時間をかけて内容を説明したり結果を議論するなど苦労話も交えて発表していた。研究者の取り巻く社会面

では、関係者への respect、つまり、チームワークの重要性であることが共通の結果であった。研究者個人面では、研究に対して誠実であること(Honesty)が重要であり、ルールやガイドラインへの準拠する姿勢であった。調査結果から RI を促進するために、5つのことが示された。1つは「Improving employment condition for researchers」、研究者にとって直接的 Workload と非直接的な workload の管理、研究の質をあげるための job security の改善すること、2つは「Institutional support」、COI 管理を間接的に組織がサポートすること、つまり研究者は研究に集中できるように周りの仕事は組織が積極的に支援をすること、3つは「Governance」、組織、Funder や研究者のためのポリシーを作成し、組織としてのガバナンスを明確にすること、4つは「Research culture」、事例からの学習機会を設定すること、また議論できる場の提供やプレッシャーからの解放などを行うこと、5つは「Training」、Training は義務化し、事例を基にした学習教材を作成し、早い段階からの教育が重要であり、PhD 学生では遅いかもしれないため、学部学生から考える環境を提供すること、である。これら5つの項目は先の Dr Maura Hiney の考え方ともオーバーラップしていた。

2. the Netherland

Dr Natalie Evans (Vrije Universiteit Amsterdam)

演者はオランダにおける2つのトピック的な RI に関するプログラムを紹介した。1つは Mapping Normative Frameworks for Ethics and Integrity of Research (EnTIRE) プログラム^{*2}が形成され、現在実施中の調査結果の一部が示された。まず、研究成果の開示や共有の考え方に関しては、出資者(Funder)の意向に大きく依存している。つまり、出資者が企業の場合には良い結果悪い結果に関わらず結果を出したがる。またデータの移管に関しても、suitable なデータでないと企業側が受け入れないという課題もある。組織文化に関しては、大学は社会のリーダーとして自身を位置づけなければならず、積極的に社会を関わるため研究成果を公表・開示していくことが重要であると強調していた。更に、教育の面では、研究不正のところから学ぶべきものがあるが、Good case からの学習をもっと増やすべきという調査結果もあり積極的に取り組んでいきたいとのことであった。そして、このプログラムでは Online の Multi-country consultation をこの2月から開始予定である。もう一つは、Academic Research Climate Amsterdam (ARCA) プログラム^{*3}による調査であり、まだプロトコルを作成したところであり、簡単なプログラムとプロトコルの紹介があった。

^{*2} EnTIRE プログラムとは、Horizon2020 の出資による研究プログラム(2017年5月~2021年4月)であり、Vrije Universiteit Amsterdam を中心に、英国、ベルギー、ノルウェー、ドイツ、米国の10研究機関とコンソーシアムを形成し、研究の評価や教育など研究倫理と RI の両方を統括するプラットフォームにすることを目的としている。

詳細情報：https://cordis.europa.eu/project/rcn/210253_en.html

*³ Academic Research Climate Amsterdam (ARCA)はオランダの4つの研究機関(University of Amsterdam, VU Amsterdam, Academic Medical Center and VU medical Center)における研究環境や RI を調査するプログラムのことであり、よい研究環境には研究者や組織は何が必要なのかを明らかにすることがこのプログラムの狙いである。

詳細情報: <http://www.amsterdamresearchclimate.nl/>

3. Denmark

Dr Sarah Davies (University of Copenhagen)

演者が自然科学者たちとのインタビューを通して、研究者に RI をどう伝えていくかをテーマにした調査結果を発表した。デンマークでは、Danish Code of Conduct があるものの、ほとんどの研究者はそれを参照していないことがアンケート調査などから示された。演者からはまた、今回の調査一つに関してもあらさがしにきたという感覚で研究者からは協力が得られず、研究不正も一部のケアレスミス範囲であることをいう研究者もあって、RI に対する考えがまだまだオープンになっていない状況であることが説明された。欧州でもオランダや英国のように先駆的に RI に取り組んでいる国々もあれば、反対にデンマークのよう RI に懐疑的な国や研究者も多くあることもわかった。

【課題に対する発表】

Distinguishing between Incompetent Research and Research Misconduct

Hugh Desmond (University of Leuven)

演者より、Misconduct case の例(Dong-Ryon Han, fabricated and falsified results of HIV vaccine trial in 2013)の紹介があり、その原因や背景などが解説された。そして研究不正には4つのパターンがあり、Negligently, knowingly, recklessly, intentionally であるとのことが示された。しかし、その境界は曖昧のため、不正が後を絶たない現状を考えると、しっかりとしたルールを作る必要がある。演者からは3つの考えが示され、1つは不正に対する厳しい対応が必要であること、2つは能力がないものが研究を行うことはもう不正であること、そして3つは、不正はただ能力がないことを広めていること、とまとめていて、研究不正に対する厳格な法律の整備が必要であると締めくくっていた。

Solving the Sharing Paradox – How Data Sharing can be promoted for the Benefit of Research Integrity

Johannes Breuer (GESIS – Leibniz Institute for the Social Sciences)

演者は RI の Good Practice の観点からデータレポジトリに関する発表をしていた。なぜ研究者はデータを見せたがらないのか？という点から話は始まり、「それはスクープ化されてしまう」ことや「そのまま評判につながる」ことのため、できるだけ秘匿し論文の審査者(Peer)のみに開示したい意向がある。実際に、医薬品開発のデータは大学や研究機関で行われたものか

らで得られ、企業にとっては極めて重要な情報であり、すべてを開示することは難しい。臨床試験の場合はケースバイケースであるものの、基本的には論文などの公開が可能であるが、実際の生データへのアクセスはほぼ不可能である。現状ではデータ開示は難しいことであるが、これまでの大学や研究機関における不正ではクローズされた環境でごく一部の関係者しかデータにアクセスすることができなかったために確認がとれず、不正となったことを考えると、不正の予防や健全な研究のためには、データシェアリングやデータレポジトリが重要となってくる。Data sharing は Open science でとても重要であり、仕組みを作っていくことが必要である。一方で、演者は現状の考え方を変えるためにも、情報共有することのメリットを打ち出す必要もある。例えば、incentive structureを整備する。Incentive structureとは開示することが研究者の評価の一つになるようにすることも重要であると結んでいた

(文責 伊藤達也)